

6 リスボン大震災と啓蒙都市の建設

キーワード：震災、啓蒙主義、都市計画、リスボン、ポンバル

金 七 紀 男*

The 1755 Earthquake and the Reconstruction of Lisbon

Key Words: earthquake, enlightenment, urbanism, Lisbon, Pombal

KINSHICHI Norio

- | | |
|-------------------|----------------|
| 1. はじめに | 3.3. バイシャ地区 |
| 2.1. 中世都市リスボン | 3.4. 商業広場 |
| 2.2. ポルトガル中世都市の類型 | 3.5. ロシオ広場 |
| 2.3. 近世都市リスボン | 4.1. プレハブ方式の採用 |
| 3.1. リスボン大震災 | 4.2. 公衆衛生 |
| 3.2. ポンバルの再建計画 | 5. 結論 |

1. はじめに

周知のように、ポルトガルは15世紀からアフリカ、アジア、アメリカに進出して各地に植民地を築き、都市を建設した。西アフリカのルアンダ、インドのゴア、中国のマカオ、ブラジルのサルヴァドールなどはその代表的なポルトガル系植民地起源都市である。これらの都市は旧ポルトガル植民地の首都であり、ルアンダ市の起源は1556年、ゴアは1510年、マカオは1554年、そしてサルヴァドールは1549年とみな16世紀に創設されている。しかもポルトガルはすぐれて海洋商業国家的性格をもち、当然のことながら植民地との連絡は船舶を通じて行なわれたので、植民地の首都はすべて海港に建設された。ほかにも、その立地条件として、外国や海賊の攻撃に備えて、市街地は湾内奥深い傾斜地が選ばれているため、その自然条件にあわせた不規則な町作りであることが多い。この点で同じ海洋進出を果たしたスペインと大きな相違が見ら

* 天理大学国際文化学部・教授

れる。スペイン人が新大陸に建設した都市の多くは内陸に立地し、自然発生的な本国の中世都市とは根本的に異なる新しい理念のもとに広場を中心に碁盤目上に都市計画されている。それは本国との関係を断ち切って、新大陸に理想郷をつくろうとするルネサンス的実験の要素を含んでいた。これに反して、ポルトガルの植民地都市はつねに本国との一体化が念頭におかれていた。

この論考では、ポルトガルの首都リスボンを取り上げた。植民地起源都市研究という本来のテーマからすれば、研究対象に宗主国の首都リスボンを選んだにしても、その都市研究は植民地起源都市との比較にまで進まなければならないが、今回はそのための基礎作業にとどまっている。本国の都市が植民地起源都市の形態や機能にどのような影響を及ぼし、どの程度その性格を規定したのかというような問題の追究は、今後の課題である。ここで取り上げるリスボンは1755年の大震災後に再建された近代都市である。時の啓蒙主義政治家ポンバル侯爵は、震災処理と同時に新たなリスボンの再建計画を立案し、啓蒙主義を体現する都市空間を創りあげた。この論考では、近代都市リスボンがどのような計画のもとに建設されたのか、そしてその都市計画にポンバルの啓蒙主義が具体的にどのように反映されているのかを検証する。

2.1. 中世都市リスボン

リスボンは、大西洋に注ぐイベリア半島最大のテージョ川右岸に位置して、外洋からは約17キロ入った地点にある。現在のリスボンは、1755年の大震災後に再建されたバイシャと呼ばれる低地帯を中心に7つの丘の上に広がり、対岸から見ると、全体が半円劇場を思わせる。その対岸カシリャスまでの距離は1000メートルあるが、さらに3キロ遡ると、川幅は最大6000メートルに達し、マール・デ・パーリャと呼ばれて内海の観を呈する(図1)。川幅が広いため、パリのセーヌ川やロンドンのテムズ川のように、テージョ川は兩岸をひとつの都市空間として結びつける有機的な連結作用を果たすことができず、対岸はアレンテージョ(テージョ川の向こう側)と呼ばれて、近代に至るまでリスボンとは独立した別空間を形成していた。

しかし大航海時代に入ると、ヨーロッパの辺境都市であったリスボンはセビリャと並んでヨーロッパの窓口としてアフリカ、アジア、新大陸を結ぶ商業活動の中心となった。そのため、ポルトガルがスペイン・ハプスブルク王朝の支配下にあった16世紀末にはリスボンをスペインの首都としてマドリードから移転する構想も出てきた

1) 増田義郎『新世界のユートピア』中公文庫、1989. S. B. デ・オランダ(池上岑夫訳)『真実と冒険—ラテンの世界』新世界社、1971。

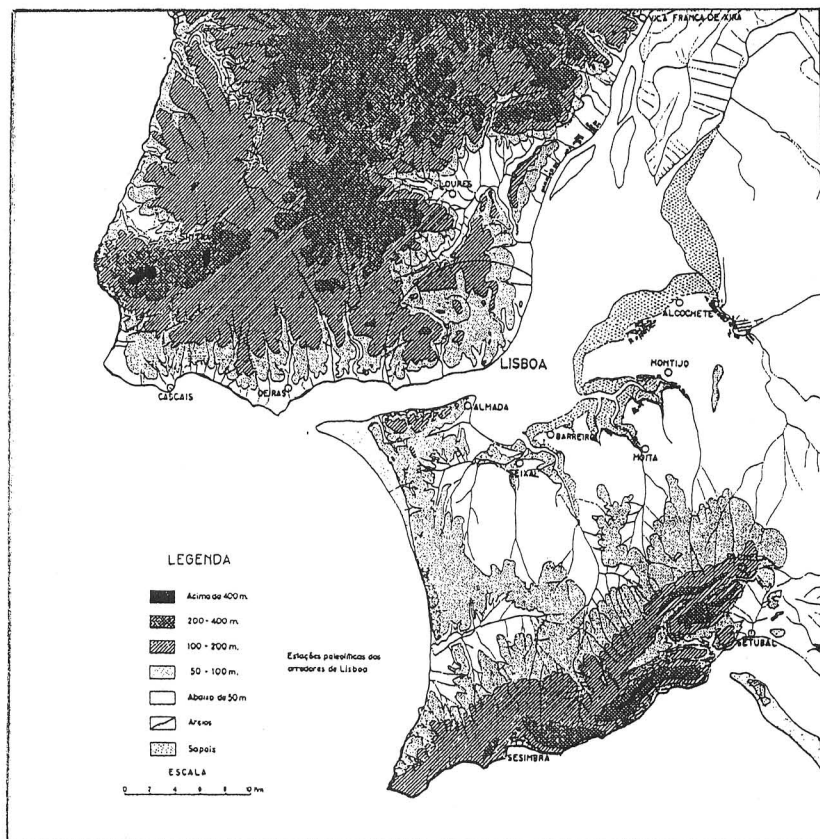


図1 テージョ川河口と内海

ほどであった²⁾。16、17世紀のスペインの首都は、たんに半島首都にとどまらずヨーロッパのハプスブルク領およびアフリカ、アジア、新大陸にもつ植民地を束ねる帝国の首都であることを要請されたからである。地理的にもポルトガルはアソレス海流を利用できる好位置にあるため、大西洋上のアソレス諸島を経由してヨーロッパに帰るアジア、新大陸からの大西洋航路やフランドルに向かう北海航路にとって、リスボンは理想的な港であった。

この天然の良港としてのリスボンの歴史は、紀元前8世紀前半のフェニキア時代にまで遡る。リスボンの原語オリシポ Olisipo は、フェニキア語のアリス・ウボ Alis Ubbo (静かな入江) に由来するとする説もあるが、現在ではタルテソス語源説が有力

2) Luís Mendes de Vasconcelos, *Do Sítio de Lisboa Diálogo*, Lisboa, 1990, p. 10.

である³⁾。紀元前 205 年ローマ人による入植が始まったオリシポ（あるいはオリシポナ Olisipona）は、ムニキピウムに昇格してフェリキタス・ユリア・オリシポ Felicitas Iulia Olisipo と呼ばれた。ローマ人の集落は、サン・ジョルジュの丘から南斜面に広がっており、1798 年にはサン・マメデ通りにネロ皇帝に捧げられた劇場跡が発見されている。その後、オリシポナはゲルマンの支配下に入り、セルカ・ヴェリャと呼ばれる城壁と大聖堂が建造された。

714 年から 1147 年まで続いたイスラム教徒の支配下でオリシポナの都市形態は完全にイスラム化された。オリシポナはリシュブナ Lixbúna と変化し、キリスト教会大聖堂はメスキタに変わった。イスラム支配の末期にはオリシポナは 1 万 2000-5000 の人口を擁していたが、城壁外にはイスラムの支配を受け入れたキリスト教徒、つまりモサラベたちが居住しており、複数の教会をもっていた⁴⁾。1147 年アフォンソ・エンリケスによって最終的にキリスト教徒に回復されるが、それまで何度もキリスト教徒の襲撃を受け、ゲルマン人の城壁は改修されて、セルカ・モウラ（モーロ城壁）と呼ばれるようになった。

2.2. ポルトガル中世都市の類型

ところで、ポルトガル中世史家オリヴェイラ・マルケスによれば、ポルトガルの中世都市はイスラム型、ローマ型、折衷型、新興型の 4 つの類型に分類される。

第 1 のイスラム型都市の典型は、川岸あるいは海岸から山頂を城壁で囲む三角形ないしは多角形を成しており、頂きに城を構えた上層階級の居住する山の手地区アルカソヴァと、山の斜面から続く庶民の下町地区アルメディナに分かれている。アルカソヴァは城から直接外部へ抜ける城門をもち、市街は雑然として通路は狭く、新たに建物をつくる余裕はない。広場がないこともその大きな特徴である。この型の都市として、リスボン、サンタレン、アブランテス、ギマランイス、ポント・デ・リマやスペインと国境を接する都市グアルダ、カステロ・ブランコ、エストレモス、ブラガンサ、カステロ・デ・ヴィデ、そして南部の都市シルヴェス、オビドス、トレス・ヴェドラが挙げられる。しかしながら、レコンキスタが終了し、都市が拡大するにつれて、その特徴は次第に失われる。アルカソヴァはその軍事的政治的重要性を失い、アルメ

3) Francisco Santana e Eduardo Sucena (Dir.), *Dicionário da História de Lisboa*, Lisboa, 1994, pp. 499-509. Olisipo は Olisipona に格変化し、それを基に Lisipona-> Lisibona-> Lixibona-> Lixbúna-> Lixbúa-> Lixboa-> Lisboa となった。-ipo の語尾で終わる集落はイベリア半島地中海沿岸に多い。José Matoso (Coord.), *História de Portugal*, vol. I. p. 143.

4) *Dicionário da História de Lisboa*, pp. 509-511.

ディナとの区別は薄れていく。商工業の発展とともにアルメディナや城壁の外に繁華街が生まれ、町の区画化が行なわれて道路が広くなったり、広場が設けられるようになった。

第2のローマ型都市は、イスラム時代に先行するローマ時代に起源をもつ。起伏の少ない平地に方形に区画され、二つの主要軸が広場フォルムで交差する。フォルムの一画には母教会 *igreja matriz* が建てられているが、そこはかつてローマの神殿が祭られていたところである。この都市の典型はブラガとエヴォラで、いずれも大聖堂が町の中心となっている。エヴォラの場合は、最古の部分は今もローマの城壁で囲まれている。そのほかローマ型の都市としては、ベージャ、セルパが挙げられる。この二つの都市には北東および北にそれぞれ城と小さなアルカソヴァを備えているが、それはローマ起源の都市にイスラム的要素が加わったものである。

第3の類型は、基本的に中世に形成された都市であるが、旧ローマ市街の周辺に発達した集落にイスラム的要素が加わった、いわゆる折衷型である。コインブラ、ポルト、ヴィゼウ、エルヴァス、ポルタレグレ、バルセロス、ファロ、ペナマコールなどがこれに該当する。

第4の新興型は、13世紀以降レコンキスタ後の開墾期につくられた都市で、碁盤目状に区画され、ヴィラ・ノヴァ *vila nova*、ポヴォア *póvoa* と呼ばれる。漁港の町に多く、セトゥバル、ラゴス、アヴェイロ、カミーニャ、ヴィアナ・ド・リマがその例であるが、内陸部ではトマルがそれに当てはまる⁵⁾。

この都市の分類に従うと、1755年の大震災によって壊滅する以前のリスボンはまさに典型的なイスラム型都市の類型に属する。図2に見られるように、ゴシックの破線で囲まれた部分はモロ地区と呼ばれ、714年に西ゴート王国を滅ぼしたモロ人によってイスラム風につくり変えられた町である。城壁内は、海拔80メートルから90メートルの山頂を占めるアルカソヴァと70メートルからテージョ川に向かって傾斜する部分のアルメディナに分かれている。ポルトガル人がこのリスボンを征服するのは建国まもない1147年のことである。征服と同時にイスラム教徒のメスキタはキリスト教の大聖堂に再び転換された。征服から32年後の1179年ようやくリスボンは、特許状フォアルを獲得し、法的に国王都市コンセーリョとして認められた。それは、このころようやくキリスト教徒入植者の数が増加したことを意味している。しかし、ほんとうにリスボンの安全が確保されるのは、1217年最終的にイスラム教徒海賊の拠

5) A. H. de Oliveira Marques, *Portugal na Crise dos Séculos XIV e XV*, Lisboa, 1987, pp. 188-190.

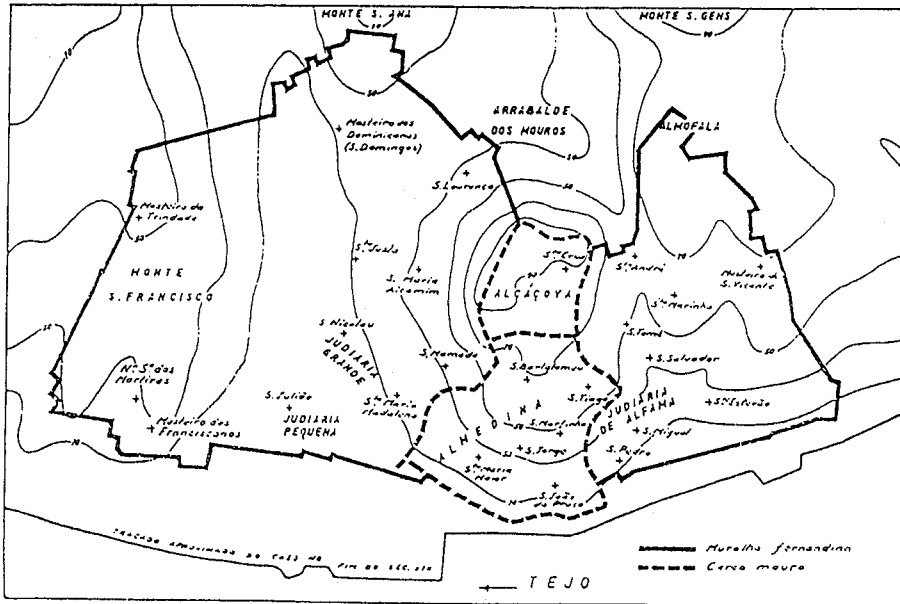


図2 モーロ城壁とフェルナンド城壁

点アルカセル・ド・サルが征服された後のことである。それまでは絶えずイスラム教徒からの攻撃の危機にさらされていた。1249年レコンキスタが完了すると、南部の経済的政治的比重が増し、1255年時の国王アフォンソ3世は王国の首都をコインブラからリスボンに移した。以後リスボンは次第に成長を遂げ、旧モーロ地区は過密状態になると、建物は1階から2階へと上に延びて、しばしば通路を覆うようになり、市街地はテージョ川に沿って東西に、ことに西に向かって大きく広がっていった。1261年リスボン市は城壁建設のための特別税を徴収し、さらに1294年にはリスボン市と国王は、海からの脅威に備えて城壁の外の西部地区に共同で城壁を建設する契約を交わした⁶⁾。

征服後モーロ城壁は徐々に拡大されたが、その工事を完成させたのはボルゴーニャ王朝最後の国王ドン・フェルナンドである。彼は1373年から75年にかけて城壁の拡充増強を行ない、いわゆる「フェルナンド城壁」を建造した(図2の太線)。城壁内の面積は、101.63ヘクタールで、モーロ地区の約6.5倍に相当する。中世末、市内の教区数は23、そのうちモーロ地区に7教区、東部地区に8教区、西部地区に8教区あったが、一部は東西の城壁を越えて広がっていた。中世末にはまだユダヤ教徒の居住区

6) Gérard Pradalié, *Lisboa da Reconquista ao fim do século XIII*, Lisboa, 1975, p. 34.

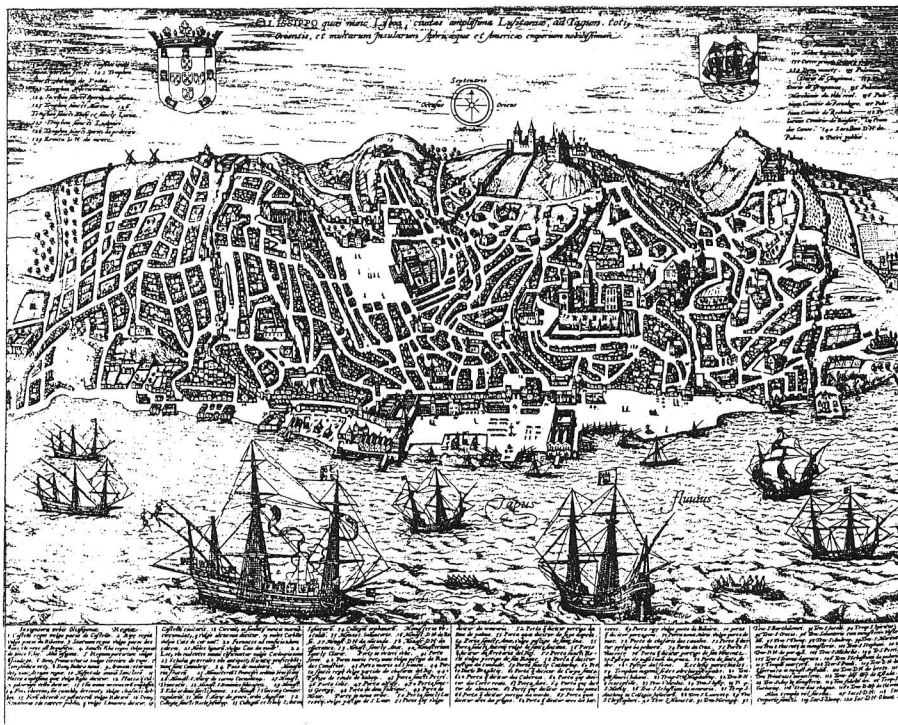


図3 ブラウニウスの子リスボン俯瞰図（1593年）

ジュディアリア3、イスラム教徒居住区モウラリア1が存続しており、行政的にはリスボン市庁の支配下にありながらも、それぞれ独自の宗教的文化的共同体を形成していた⁷⁾。これら居住区が消滅するのは、1497年マヌエル1世がユダヤ教徒・イスラム教徒を強制的にキリスト教に改宗させたことによる。

2.3. 近世都市リスボン

15世紀、大航海時代の開幕とともに海外からの富が流入し始めて港の比重が大きくなると、マヌエル1世は山城のアルカソヴァから川岸のリベイラに下りてきて、テージュ川に面して王宮を建造した。こうして、リスボンはさらにもうひとつイスラム的要素を払拭することになる。近世都市リスボンにかんしては、1554年に書かれたダミアン・デ・ゴイスの『リスボン地誌』⁸⁾ および1593年ブラウニウスの子リスボン鳥瞰図

7) Teresa Rodrigues, Aspectos da Administração Municipal de Lisboa no século XV, em Separata dos Números 101 a 109 *Revista Municipal*, Lisboa, 1968, p. 20.

8) Damião de Góis, *Descrição de Cidade de Lisboa*, Lisboa, 1998.

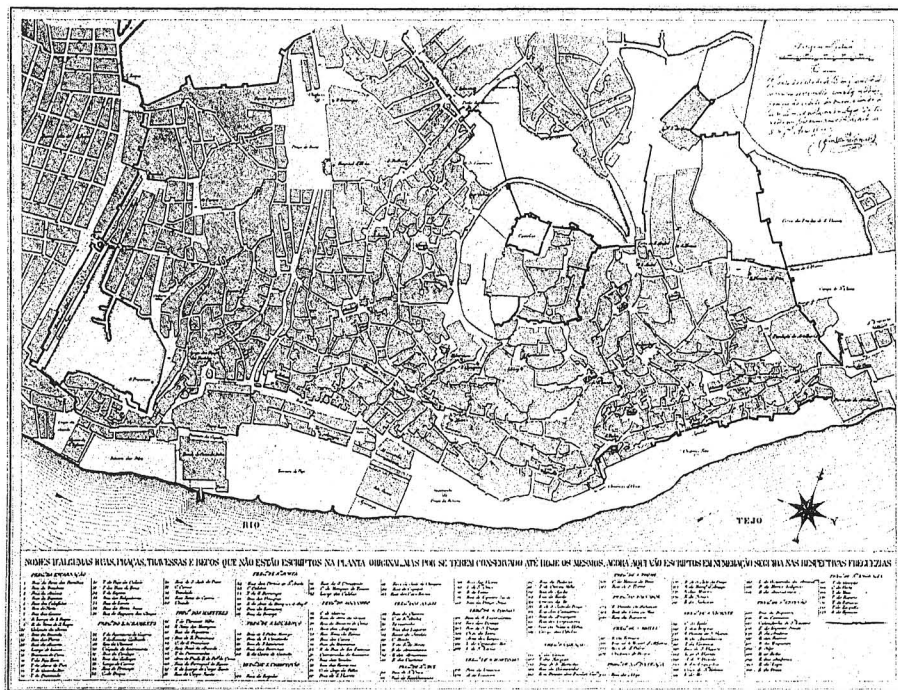


図4 17世紀中葉のリスボン市街図（1650年）

によってその概略を知ることができる（図3）。これらの資料によると、リスボン大聖堂はアルメディナに位置しているものの、社会活動、経済活動の中心である王宮広場とロシオ広場はモーロ地区の外にあって、リスボンの中枢部は完全に低地バイシャ地区に移っていることがわかる⁹⁾。

このリスボンの地理的拡大は、人口増加の推移によってもはっきり裏づけられる。1527-32年6万5000を数えたリスボンの人口は、同世紀の第3四半紀には12万に激増し、さらに1639-40年には18万、1730年には25万を記録している¹⁰⁾。1650年のジョアン・ヌネス・ティノコによるリスボン市街図（図4）は、フェルナンド城壁を越えて、市街地が広がっていることがわかる。

16世紀末からフィリペ王朝下に大々的な王宮の改築が行なわれ、サン・ヴィセンテ教会やネセシダデス修道院が建立された。ジョアン5世のパロック時代には貴族の館や税関所、異端審問所、海軍工廠などの公共建築物が次々と建造された。しかしなが

9) 16世紀のリスボンの発展については、拙稿「ルイス・フロイス時代のリスボン：職業から見た都市構成」 in *Luis Fróis, Embassy of Portugal in Japan*, 1997. を参照。

10) Teresa Rodrigues, *Crises de Mortalidade em Portugal Século XIV e XV*, Lisboa, 1990, p. 42.

ら、リスボンの都市構造そのものには大きな変化はなく、本質的には中世都市の延長と言ってよい。とくに外国人旅行者の目に映ったリスボンのイメージは、「広場が少なく、通りは不規則で狭く、不潔で暗くて悪臭を放ち、建物は不統一である」とまったく否定的で、またあるフランス人はリスボンを「アフリカの都市」と呼んだ。大震災前のリスボンについて、「リスボンに来る人はみなこれと思うような建物がひとつとしてないことに驚く」。強いて言えば、イタリア人フィリポ・テルツィの設計したサン・ヴィセンテ・デ・フォラ教会とジョアン5世によって手直しされた王宮、震災の7か月前に完成したオペラ劇場、当時フランスでも「この種のものとしては最も壮大な建造物」と書かれているリスボン水道くらいのものであった¹¹⁾。

3.1. リスボン大震災

1755年11月1日、晴れ渡った日曜日の朝9時30分すぎ、直下型の地震がリスボンの大地を激しく突き上げ、次いで北から南に激震が貫いた。地の底からは雷鳴のような大音響が伝わってきた。振動は二度の間隔をはさんで6-7分間続いた。大地は裂け、その亀裂から硫黄分を含んだ蒸気が吹き上げた。建物は激しく揺れ、倒壊した。倒れた建物から舞い上がる埃は空を覆い、生き残った者たちを窒息死させんばかりであった。海岸では大きく返した波が海底をあらわにした後、怒濤となって海辺の集落を襲った。テージョ川は激しく波立ち、巻き上がった水は滝となって落下した。船は転覆し、岸辺に打ちつけられ砕けた。何千人もの人が倒壊した建物の下敷きになり、続いて都心に起こった火事から逃げまどう人びとの阿鼻叫喚で、まさに生き地獄の有り様であった。地震に続いて起こった火事で、夕暮れ時にはリスボン全体が炎に包まれた。火災による被害は地震そのものの被害よりも甚大であった。夜11時ころ二度目の揺れが起こった(図5、図6)。

生き残った人びとは城門の外に逃れた。通りは死人で溢れ、瓦礫の下にはさらに多くの遺体があった。遺体の腐敗でペストの蔓延が震災に追い打ちをかける恐れがあった。したがって、死者を埋葬し、生き残った者を手当てすることが焦眉の問題となった。ただちに遺体を埋葬する措置がとられ、リスボン大司教に遺体を海に投棄できるかどうかという問題が提起された。生き残った者への救援には、まず最初にサン・ベントなどの修道院、イエズス会の聖職者¹²⁾が立ち上がった。トドス・オス・サント

11) Helena Murteira, *Lisboa da Restauração às Luzes*, Lisboa, 1999, p. 31. ただし、リスボン水道が完成するのは、大震災後の1799年のことである。

12) イエズス会は他の修道会に先駆けて被災者の救援活動を行なったが、その一方でこの地震／



図5 1755年以前のリスボン



図6 リスボン大震災図

の原因を時代の不信心と人びとの罪に求め、地震が自然現象だと考えるリベイロ・サンシェス、モレイラ・デ・メンドンサらを無神論者と非難した。地震神罰説をめぐるイエズス会との論争については、Lúcio de Azevedo, *O Marquês de Pombal e a sua época*, 1990, pp. 128-130. を参照。ポンバルは地震が起こった状況についての調査を命じており、メンデス・コレイアによれば、国立文書館トレ・デ・トンボの「教区報告書」Memórias Paroquiais にはこの地震を科学的に研究できる材料が残されている。

ス病院をはじめ、リスボンにあった6つの病院はことごとく壊滅したため、彼らはサン・ベント修道院、サウデ修道院、サン・ロック教会の近くに応急の病舎をつくり負傷者や病人を手当てした。食糧をただちに、しかも安価に供給する態勢が整えられた。市内への食糧の流入とその配給が管理され、免税措置がとられ、投機を防止するために価格が定められた。違反者は厳罰に処せられた。秩序維持のために地方から軍隊が送り込まれ、強盗や空き巣を防止する対策がとられた。逮捕された強盗は市内4箇所に設けられた絞首台でただちに処刑された。

以上は、目撃者モレイラ・デ・メンドンサが地震から3年後の1758年に出版した『世界地震史』からの引用であるが、彼は死者の数をおよそ5000人、さらに怪我やショックで11月中に亡くなった者の数もほぼ同数と見積もっている¹³⁾。震災にあった街路の3分の2は居住不可能となり、2万戸の家屋のうち居住可能なものはわずかに3000戸、40の教区教会のうち35が破壊され、75の修道院のうち残ったのはわずか11、6つの病院はすべて壊滅した。リベイラ王宮、わずか7カ月まえに落成したばかりのオペラ劇場、城代の居住するアルカソヴァス宮殿、サン・ジョルジュ城やカダヴァル公爵をはじめ貴族の邸宅も消滅した。王宮や貴族の邸宅に所蔵されていた財宝・名画、ジョアン5世がブラジルの金で買い入れた貴重な書籍が一瞬にして灰塵に帰した。被害は地震そのものよりも、その後に起こった火事によるほうが甚大であった。大震災のニュースは外国でも驚きをもって迎えられた¹⁴⁾。

このリスボン未曾有の災害に直面して、一連の緊急措置を講じたのは、国王ドン・ジョゼ1世の即位と同時に外務・軍事大臣に登用されたセバ스티アン・ジョゼ・デ・カルヴァーリョ・イ・メロ、のちにボンバル侯爵であった。震災の翌1756年5月、彼は宰相に任命される。以後、77年まで独裁政を敷くことになるが、国王によるこの全幅の信頼は、震災対策に遺憾なく発揮されたその辣腕によるものであった¹⁵⁾。

13) Joaquim Joseph Moreira de Mendonça, *Historia Universal dos Terremotos, que tem havido no Mundo*, Lisboa, 1758, pp. 113-150. 当時のリスボン人口は25万人を記録しているが、いわゆるモニュメンタルな都市ではなく、本質的には中世都市の量的拡大にすぎなかった。当日は万聖節に当たり、教会ではミサが行なわれていたが、時間が早かったため教会に参列する信者の数は多くなかった。地震の起こる時間をもっと遅かったならば、破壊した教会の下敷きになった犠牲者の数はもっと多かったであろう。このため、当時からすでに「不幸中の幸い」と言われていた。

14) たとえば、ヴォルテールは『カンディッド』のなかで「地震でリスボンの町が四分の三破壊され」と述べている。ヴォルテール『モンテスキュー、ヴォルテール、ディドロ』世界文学体系16、筑摩書房、昭和35年、162-164頁。ゲーテも六歳の時リスボン大震災を耳にし、彼の自伝『詩と真実』のなかで幸福な時代に起きた「異常な世界的事件」と記述している。『ゲーテ全集 第9巻 詩と真実 第一部・第二部』人文書院、昭和35年、25-26頁。

15) 彼の側近としては、ラフォンイス公爵、アレグレッテ侯爵、マリアルヴァ侯爵がいた。大ノ

イギリスをはじめ外国からも援助が寄せられた。ボンバルはリスボン再建のために植民地に対してさまざまな税をかけた。リスボン市当局は、税関で取り扱われる商品にかかる税の4パーセントをリスボン再建の費用として国王に提供した。

3.2. ボンバルの再建計画

ボンバルは直ちにリスボン再建を構想する。街路から瓦礫の一掃、溜まった水の排除、各地区の区画の整備・測量・登記が震災直後の11月から実施された。12月30日には土地台帳の作成が完成するまではいかなる家屋の建設も禁止する法令が出され、この法令に違反する建造物は解体を命じられた。急場のしのぎとして市内の広場に約9000戸の木造バラックが建造された。12月30日の法令には新しい都市計画が言及され、これまでのように無秩序な都市にならぬような措置が講じられることになった。

その間、ボンバルは、1755年12月4日に王国の工部卿マヌエル・ダ・マイア將軍からいくつかの計画案を得ていた。その主な計画は、

1. 街路を拡張し、新たな建物は3階建てに制限するほかは従来の市街を踏襲する。
2. 最も被害の大きかったバイシャ地区に残った建物はすべて取り壊し、まったく新しい都市計画に基づいて再建する。
3. 壊れた家屋は家主に任せて、新たな首都は旧リスボンを離れ、ベレンの近くに再建する。

マイア將軍は、まったく新しい場所に何の制約も受けない新首都を造る計画を推していたが、国王あるいはボンバルは第2案を採用した。

具体的な設計の責任者はエウジェニオ・ドス・サントス大尉、カルロス・マルデル中佐が選ばれた。こうして、マイア、サントス、マルデルからなる「ボンバル風リスボン」再建チームが結成され、3人の下に6つの班が作られた。

マイア將軍は衛生問題に留意し、主要な街路に排水口を設置することによって、毎朝窓から投げ捨てられたゴミ・汚物を収集するという伝統的な方法を変えた。また住民を悪臭から守るために窓にはガラスをはめ込むことを義務づけた¹⁶⁾。

都市計画に当たって、ロンドンとサルディニア王国の首都トリノが参考にされたという。ロンドンは、1666年の大火ののち再建され¹⁷⁾、トリノはごく最近大規模な工事

、震災に続いてとられた措置についての基礎資料としては、Armador Patrício de Lisboa, *Memorias das principais providencias que se deram no terramoto que padeceu a corte de Lisboa no ano de 1755*, 1758. ただし、筆者未見。

16) 以下の論究は全面的に José-Augusto França, *A reconstrução de Lisboa e a arquitetura pombalina*, Lisboa, 1981. に依拠している。Pp. 16-22.

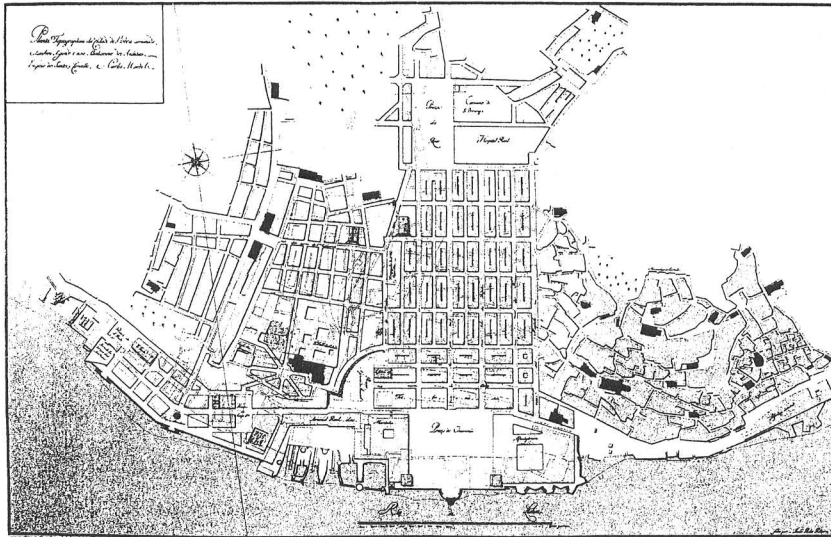


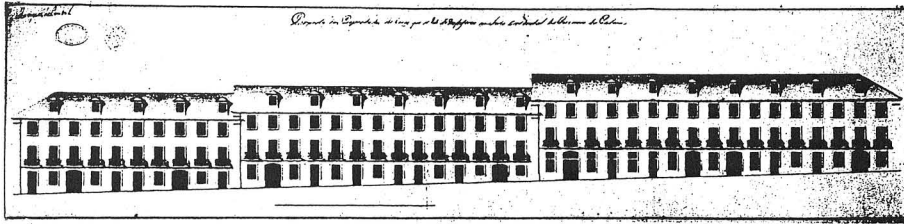
図7 エウジェニオ・ドス・サントスの都市計画面

が行なわれたばかりであった。トリノの場合には古いものを壊して新しいものを造ったというのではなく、「古いトリノに新しいトリノを加えた」という理由であり参考にならなかった。ロンドンにかんしては、ポンバルが外交官としてイギリスに駐在した経験から多くの知見を得ているはずであるが、具体的にどう生かされたかは不明である。

3.3. バイシャ地区

計画の対象になる地域は、王宮広場とロシオ広場の間に位置し、リスボン市の心臓部に当たるバイシャ地区とサンタ・カタリナ城門（現在のドウアス・イグレジャス広場）までサン・フランシスコ丘を含む西部地区で、合わせて約63ヘクタールに相当する。提出された複数のプロジェクトのなかからエウジェニオ・ドス・サントスの設計した計画がポンバルによって採用され、若干の修正を加えられて今日見られるリスボンの街区の原型ができあがった（図7）。サントスの設計に近いものに、王宮広場をテージョ川から切り離し西側に大聖堂を建てるという有力なポッペの案があったが、

17) 1666年のロンドン大火とシティの再建については、見市雅俊『ロンドン＝炎が生んだ世界都市』講談社、1999年。クリストファー・ヒバート（横山徳爾訳）『ロンドンある都市の記録』朝日選書、1997年、101-118頁。シティの面積は、395エーカー（約16ヘクタール）でリスボンの63ヘクタールの約2.5倍に相当する。



Sequência de fachadas da Rua da Palma.

図8 ポンバル様式の家並み（パルマ通り）

まさにこの2つの理由から排除された。

サントスの計画では都市全体のダイナミズムを保障する街路が網の目状に交差している。王宮広場とロシオがバイシャの南北2つの核として決定的な役割を果たし、3本の街路がこの2つの広場を結んでいる。地主は新しい建物の敷地に対して以前と同様の権利をもち、それを売買できると規定された。優先特権の所有者には建設に必要な資金が提供されることになった。

1756年6月12日ポンバルはバイシャの最終計画を責任者に委ねた。3年後の1759年7月12日アウグスタ街の敷地、翌60年10月28日には残りの再建地域全体を分配する政令が公布された。11月には各ギルドにその職業名を付した街路が与えられ、靴屋街、革細工師街、鍍金師街、絹織商街、雑貨商街、呉服商街などが生まれた。

1758年6月12日の政令で街路を1級、2級に分類し、第1級街路は道幅を最大限60パルモ（1パルモは22.5cm）、歩道は左右それぞれ10パルモとし、さらに排水溝の取り付けを義務づけた。また第2級街路は最大限40パルモと規定された。建築物の高さは王宮広場テレイロ・ド・パッソの高さに揃え、第1級街路の建物の正面2階にはバルコニーを、それ以上の階には窓を備え、第2級街路では窓のみとされた。

第1級街路は南北に商業広場とロシオを結ぶ3本の通り、つまり中央のアウグスタ街、西側のアウレア街（金座通り）、東側のベラ・ダ・ライーニャ街（今日のプラタ街、銀座通り）と商業広場の北側を東西に走るエルレイ新街の4つのみで、とくにアウグスタ街とアウレア街は「高貴なる街路」と命名された。

リスボン再建計画の最高責任者マヌエル・デ・マイアは当初、地震の再発に備えて新たに建造される建物はすべて2階建てに設計していた。しかしポンバルはこの案を退け、58年エウジェニオ・ド・サントスの計画に従って、バイシャの主要街路の建物は4階建てとし、地上階は商店、2階以上は居住用として2階にはバルコニー、3階には窓を設け、4階の屋根は傾斜面とした（図8）。外観を統一された建物は、街路の等

級に応じて正面の装飾が豊かな順に A 級、B 級、C 級と 3 段階に分けられた。しかし簡潔をむねとしてどの建物にも階段、コンソール（渦形持ち送り）、窓格子、そして馬を繋ぎ止める輪金具までも取り付けを禁止した。建物の内部にも厳格な規定が設けられた。中庭パティオは設けず、アトリウム、階段も最小限とし、台所以外に煙突を設けてはならず、廊下も手洗いもなかった。このようなボンバル様式に対する同世紀末の外国人旅行者の印象は、「どこもかしこもまったくといっていいほど同じ設計、同じ装飾、同じ様式」という批判と同時に、「すばらしい効果をもった巨大な建物群」という好意的な意見もある。

再建工事の進捗状況については、工事監督官のモンテイロ・カルヴァーリョ報告によると、地震から 10 年経った 1766 年までバイシャ地区には 59 の建物（アウグスタ街 31）、さらに 10 年後の 1776 年までにその他の地区を含めタリスボン全体でさらに 140 の建物が完成している。1758 年の政令は、5 年の期間内に利用できなかった土地は他人に譲渡されねばならないと規定していたが、ボンバルの統治期間約 20 年を経てもなおバイシャには多くの土地が利用されずに残っていた¹⁸⁾。

3.4. 商業広場

王宮広場に代わる商業広場はテージョ川に面し、植民地帝国の首都、国際貿易都市としてのリスボンの表玄関である。南北に 177 メートル、東西に 192.5 メートルの長方形を成し、広場の東・西・北の 3 面はアーケードを備えた建物に囲まれた¹⁹⁾。北面の中央に始まるアウグスタ街路の起点には凱旋門が設けられ、東側と西側の建物はテージョ川に面してそれぞれ塔が設計された。

リスボンがボンバルの構想を体現して、なによりもブルジョア都市であることの表象は、1758 年 1 月 16 日の勅令でリスボン商人にこの広場に設立を認められた商品取引所 *Praça* である。大震災以前にはフェロス新街に置かれていたが、ボンバルのブルジョア重視政策によってリスボンの表玄関に設置されることになったのである。建設費用は、国王に対して行なわれた 4 パーセントの寄附金によって賄われた。したがって、通常 *プラッサ・ド・コメルシオ* は「商業広場」と訳されているが、本来は商品取引所の意味をもち、建物からそれが置かれている広場の名前になったことになる。当

18) França, *op. cit.*, pp. 22-32.

19) テレイロ・ド・パッソは長さ 620 パッソ（1 パッソは 82cm）、奥行き 200 パッソで商業広場よりもかなり縦長（136.4m × 44m）であった。Fernando Castro-Branco, *Lisboa Seiscentista*, Lisboa, 1990, p. 27.

初の計画では、この広場はヨーロッパの伝統に従って「国王の広場」ブラッサ・レアルとして設計され、国王の騎馬像も設置されたが、計画の途中でその名称が変更されたのである。新しい名称はすでに 1759 年におけるポンバルの「通告」に現れており、最初は「王の商業広場」とされていたが、最終的に形容詞が取り除かれた。商業広場は、中央に設立された国王ドン・ジョゼの騎馬像の除幕式が行なわれた 1775 年によってやくその一部の建物が建設された²⁰⁾。

3.5. ロシオ広場

新しくリスボンのフォーラムとなった商業広場は、古いロシオの社会的役割の一部を吸収することになった。かつてのロシオは異端審問所、ドミニコ派修道院、トドス・オス・サントス病院に囲まれ、王宮広場に勝るとも劣らない重要な役割を担っていたが、新しい計画では商業広場の役割が重視され、ロシオは面積も商業広場の半分に設計された。しかし最も早く工事が進んだのはロシオであった。広場は 1765 年に完成し、東の部分に占める建物もできあがったが、全体として完成するには 1840 年まで待たねばならない。

異端審問所は南面に建てられた。ポンバルの異端審問所改革以前のことである。しかしながら、この建物は 1836 年の火災で消滅し、その跡地に現在のマリア 2 世劇場が建てられた。ロシオ広場を取り囲む建物は、バイシャ地区のものと若干異なり、2 階の正面はバルコニーと窓が交互に設けられて、控えめながらひとつのリズムをつくっている。もうひとつの違いは、屋根が切妻型、いわゆる「ゲルマン風」になっており、ロシオの景観の大きな特徴となっている。

かつてロシオ広場の東側に面して威容を誇っていたドミニコ会修道院とトドス・オス・サントス病院は結局再建されず、跡地には市場が設けられることになった。さらに広場の北側、すなわち旧市街の外には、1764 年レイナルド・マヌエルの設計で塀に囲まれた遊歩道が設置された (図 9)。トネリコの並木が続く長さ 300 メートルの遊歩道は、庶民には入場できないブルジョアジー専用の空間とされたが、18 世紀末外国人の観察によれば、「ポルトガル人にはあまり散歩をする習慣がなく」、訪れる人もまばらであった。しかしながら、新しい都市計画に公共の遊歩道が導入されたことの意味は看過できない。ポンバルの合理主義にはわずかとはいえ「自然」を採り入れることによってロマン主義の萌芽を感じさせる²¹⁾。

20) França, *op. cit.*, pp. 32-35.

21) *Ibid.*, pp. 35-37.

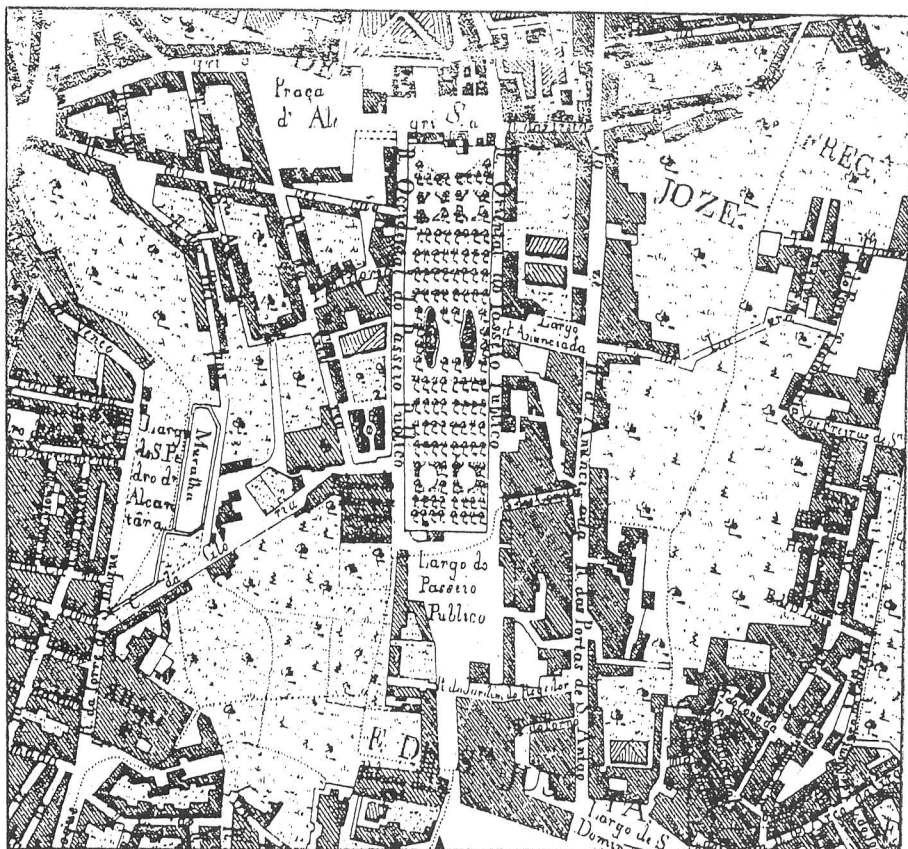


図9 緑地帯・遊歩道

4.1. プレハブ方式の採用

ボンバル統治期における建設の状況については、リスボンの半分が再建されたという記録や3分の1しかできあがらなかったとする記録もあり、情報は混乱している。確かな記録としては、市役所が公共事業に当てた費用の具体的な数字が一部知られている。その総額は、約383コント・デ・レアイスで、その内訳は、穀物倉に107コント・デ・レアイス、その他の倉庫と市役所の建物に121コント・デ・レアイス、波止場の建設に102コント・デ・レアイス、商人用の倉庫に42コント・デ・レアイス、フィゲイラ広場の建設に10コント・デ・レアイスとなっている。その財源には関税収入の4パーセントが当てられた。他方、民間による建設にかんしては、地主が建設費用を捻出できない場合には必要な資金を貸し出す制度が採られ、すでに述べたように、5年以内に土地を利用できない場合には、その土地は競売に付されることになっ

ていた。競売で土地を購入できたのは、当然のことながら、ポンバルによってさまざまなの特権を受け保護されたブルジョアたち、なかでもカルダス家、クルス家、マシャドス家で、彼らはバイシャ地区、その他の地区の建築業者として現れてくる。その一方で、震災で没落した貴族たちは再生の見込みもなく、また建設ブームが生み出した投機活動にも参加できなかった。1776年までにバイシャ地区に新たに不動産を手に入れた貴族はわずかに10人、その他の地区でも8人で、これは全体の3パーセントにすぎない。

リスボン再建にかかわる事業はすべて海軍工廠の近くに設立された「公共事業設計事務局」で扱われた。地震によって小規模の建設工事請負業者は消滅したが、リスボン再建という大工事を完成させるには建材の大量生産を可能にし労働力を合理的に配置できる態勢が不可欠であった。そのためにプレハブ方式が採用され、石材・木材・金具すべてにわたって規格化が行なわれた。建材は、それぞれの石切り場、製材所、工場において建設現場で組み立てるばかりに仕上げられて運送された。そのため建材の装飾は最小限にとどめられ、たとえば、階段や部屋の腰板の部分に内装されるアズレージョは、同じパターンが繰り返される絨毯様式が採用されて、いかなる規模にも適応できるように工夫された。ジョアン5世期の装飾的な壁画はほとんど姿を消してしまった。組み立て方式は一時的なバツラク建物にも適用され、たとえば、1766年ポルトガルを旅行したあるフランス人はオランダから輸入された建材がわずか24時間で完成したと伝えている。

このように、ポンバルにとって住宅を建設して被災者を収容することは緊急の課題であったが、同時に未曾有の災害を被り、地震の再発を恐れる市民のために建物の安全にも十分配慮する必要があった。マヌエル・ダ・マイアが最初2階建てに固執したのも建物の安全面を重視したからであったが、採算性という現実的な理由から2階建て案は最終的に採用されなかった。そのため3階・4階建ての家屋でも耐震性を備えた構造を工夫する必要に迫られて、簡単な原理で工事が容易な、いわゆる「鳥籠」方式が採用された(図10)。鳥籠方式とは、木材の弾力性を利用した木枠の構造が地震の揺れに対応して建物全体の崩壊を防止する方法である。ポルトガルではこの方式はカルロス・マルデルの発明とされているが、公共事業設計事務局のなかで経験的に生まれたものと考えられる。地震対策のほかに、火事の延焼を阻止する装置として建物と建物の間に防火壁が設けられた²²⁾。

22) *Ibid.*, pp. 51-58.

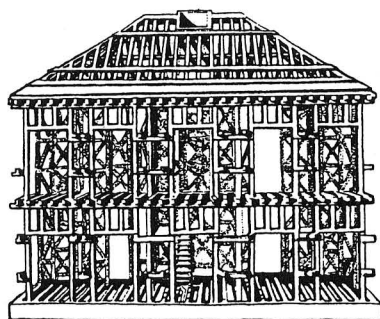


図 10 鳥籠方式

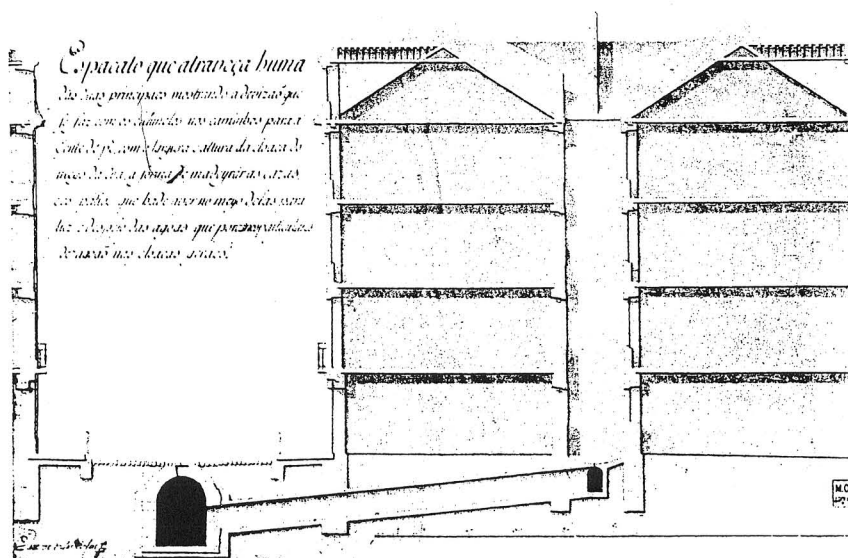


図 11 下水設備

4.2. 公衆衛生

すでに述べたように、マイア将軍は衛生問題に留意し、主要な街路に排水口（図 11）を設けて、毎朝窓から投げ捨てられたゴミ・汚物を収集するという伝統的な方法を変えた。また住民を悪臭から守るために窓にはガラスをはめ込むことを義務づけた。さらに各戸に水道の設置を計画したが実現できず、便所はなく台所に置かれた水鉢で用を足し、水は共同の水汲み場からガリシア人の水汲みによって運ばれてきた。しかし、1775 年の政令は「リスボン市民は粗野で、公共の場にゴミを平気で捨てる」と嘆いており、18 世紀末になっても通りを歩く人の上に窓から汚物が投げ捨てられ

た。

また同年リスボン市も「公衆衛生はおよそ世界の先進国では考慮すべき最重要かつ最優先課題である」と規定している。教会での遺体の埋葬についても市当局とサンティシマ兄弟会との間に論争が行なわれ、市当局は教会での遺体の埋葬は公衆衛生にきわめて有害であるとし、それに代わる措置として墓地での埋葬を主張している。当時の公衆衛生観は、「清浄な空気」という概念と密接に結びついている。清浄で健康的な空気は健康の維持に益し、有害で腐敗した空気はそれに反すると考えられ、「腐敗した遺体の放つ蒸気」は空気を汚染する原因とみなされていた。この清浄な空気がまさにリスボン再建計画の目指す目標になっており、「空気と光の自由」は、新設される碁盤目状の市街とそれに連なる広場、遊歩道によって確保されるものであった。「開かれた長いパースペクティヴによって光が自由に差し込み、古い閉ざされた世界の闇が一掃される都市、それは形態的にもイデオロギー的にも二重に照らし出されている (iluminado) ように思われる」²³⁾。

5. 結論

リスボンの大震災はヨーロッパに大きな反響を呼んだが、その後の対応について国外で注意を払われることはなかった。旅行者が街路に残る瓦礫の山に印象づけられたにすぎない。当代フランスの建築家デュランは、ロンドンやトリノに関心を寄せてもリスボンにはまったく注意を払っていない。リスボンの再建事業は、ヨーロッパではほとんど無視されていたようである。リスボン再建計画者が直接模範とした都市はなかったが、その源を遡るならば、ルネサンス・イタリアのアルベルティやフィラレッティに行き着き、その具体例をフランスの要塞都市ヴォーバンに求めることができる。

都市計画理論にかんして彼らが受けた影響として、サレント・デ・フェネロンやデカルトを挙げることができるという。18世紀当時デカルトの書物は禁書扱いにされていたが、マヌエル・ダ・マイアの前任者アゼヴェド・フォルテスによって推奨されていた。都市設計は全体を調整するひとりの建築家によってなされるべきであるというデカルトの説が受け入れられたのであろうか。また後年エウジェニオ・ドス・サントスは、リスボン再建後の世代の建築家によってフェネロンの都市計画構想に忠実すぎたことを批判されることになる²⁴⁾。

23) *Ibid.*, pp. 60-63.

24) *Ibid.*, p. 74.

被災地に大規模な都市計画を実現することは、新しい土地に都市を建設するよりもはるかに多くの困難をとまなうが、ポンバルはあえてこの計画を断行した。震災の起きた18世紀後半はブラジルの金ブームが終りを告げようとしており、ポルトガル経済は不況期に差しかかっていた。こうした時期に膨大な費用を要する再建事業を実現するには、経費の切り詰めは至上命題であり、そのため公共建築物の建設はコストが少なくてすむ単純で対称的、規則的な設計に基づいて行なわれた。しかも迅速に工事を進める必要からプレハブ方式が採用され、さらに耐震性を考慮した鳥籠方式という工法も編み出された。

そしてポンバルの合理主義は、簡潔さ、均整、調和、利便性によって体现されている。また、このころから発達した公衆衛生観念によって快適な都市環境、健康的な居住空間への要求が高まっており、それが碁盤目状の区割りや下水工事の完備に具体化されたことは啓蒙主義政治家としてのポンバルの優れた見識を示している。教会建築にかんしても、世俗化を推進したポンバル独自の宗教観を反映し、教会といえども他の建物と同じ高さにそろえられて、その大半は塔をもつことを認められなかった。そして何にもましてポンバルの本領が発揮されたのは、商業広場の建設においてであった。ブルジョアジーの保護育成を社会・経済政策の主要な目標としていたポンバルが商品取引所の置かれたリスボンの表玄関にあたる広場を商業広場と命名したことは、ポンバルがリスボンをブルジョア都市として構想したことの証左である。しかし、この広場の中央に国王ドン・ジョゼの騎馬像が設置されたことは、ポンバルが絶対王政という身分制の枠から抜け出すことができなかったことを示しており、ブルジョア広場に王権の象徴が設置されるというポンバル啓蒙主義の両義性を映し出している。

参考文献

- Azevedo, J. Lúcio de.
1990 *O Marques de Pombal e a sua época*, Lisboa.
Castelo-Branco, Fernando.
1990 *Lisboa Seiscentista*, Lisboa.
França, José-Augusta.
1981 *A reconstrução de Lisboa e a arquitetura pombalina*, Lisboa.
Góis, Damião de.
1998 *Descrição de Cidade de Lisboa*, Lisboa.
Hespanha, António Manuel (pref.).
1997 *Cartografia de Lisboa Séculos XVII a XX*, Lisboa.
Mendonça, Joaquim Joseph Moreira de
1758 *Historia Universal dos Terremotos que tem havido no Mundo*, Lisboa.
Murteira, Maria Helena da Cunha.

- 1999 *Lisboa da Reconstrução às Luzes*, Lisboa.
- Rodrigues, Maria Teresa Campos
- 1968 Aspectos da Administração Municipal de Lisboa no século XV, em Separata dos Números 101 a 109 *Revista Municipal*, Lisboa.
- Santana, Francisco e Eduardo Sucena (dir.)
- 1994 *Dicionário da História de Lisboa*, Lisboa.
- Vasconcelos, Luís Mendes de
- 1990 *Do Sítio de Lisboa Dialogo*, Lisboa.
- ヴォルテール
- 1950 『モンテスキュー、ヴォルテール、ディドロ』世界文学体系 16、筑摩書房。
- ゲーテ
- 1950 『ゲーテ全集 第9巻 詩と真実 第一部・第二部』人文書院。
- 見市雅俊
- 1999 『ロンドン＝炎が生んだ世界都市』講談社。